



若者

藤ノ木古墳

川 辺 了 一*

数年前、文学部史学科の都出（つで）比呂志先生に飛鳥を案内してもらって以来、古代の遺跡や遺物にも誰が何の目的で作ったかなど考えると面白く興味を持つようになった。

昨年は島根・斐川町の荒神谷遺跡の青銅器、奈良・明日香村の宮跡の天津皇子（天武天皇の子）らの名を記した木簡、福岡市飯盛高木遺跡の弥生墳、四条畷市の2000年前の木棺出土など古代人の生活を知る資料として新聞誌上等を賑わした。

私の生れ育った「斑鳩の里」は、最古の木造建築「法隆寺」で有名であったが、法隆寺から西へ徒歩5分位の所に朱塗りの家型石棺と金銅製馬具等が出土した『藤ノ木古墳』がクローズアップされた。

奈良県立橿原考古学研究所の藤井利章氏の話によると、藤ノ木古墳（江戸時代地元の人々に「みささぎ」* または「みささぎ山」と呼ばれる）は丘陵の硬い地盤の所を選び石を垂直に五段積み、その上に大きな天上石（推定35トン、石舞台は70トン）を乗せてある。石棺は礫（小石）の上に水平に安置され両横は15cmと20cmしか壁から離れていないので横穴入口から羨道を通して玄室に安置するのは不可能である。これは両壁を二段位石を積んで石棺を入れ、土で埋めて保護してから石室を作ると考えられるということである。

石室の形式や古墳（塚）の形などから六世紀後半の作りで、家形石棺が使用された時代を前中後の三期に分けると縄かけ突起の形から藤ノ木古墳の石棺は中期の形である。

馬具は、目出度いものとされている亀甲紋、パルメット（頭に付ける羽根飾のようなもの）文、江戸時代まで日本人が見た事がない象（象

の頭にパルメットが付いている）、亀、鳥（鳳凰と思われる）、鬼神等が透彫された鞍金具や金銅製鳳凰文杏葉、鉄地金張唐草文杏葉など、また鞍金具は、美術的に中国の影響を大きく受け、実用面では朝鮮半島の影響を受けている。

他に須恵器（硬質土器）¹⁾、土師器、武具等多数出土している。

この古墳は天皇陵と朝鮮半島の王陵の中間に格付け出来るだろうということである。

私が藤ノ木古墳に興味を持ったのは、石棺の安置と石室の作り方、馬具、被葬者は誰であるかなどである。

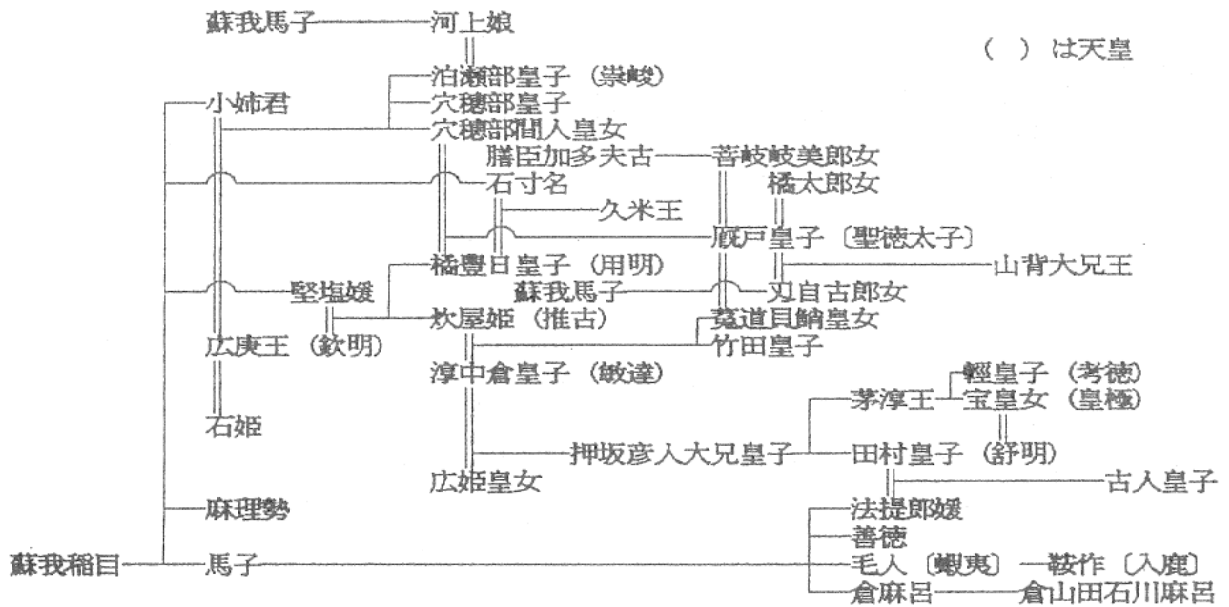
4.5トン～5トンもある朱塗りの石棺（『赤色』は現在では単にお目出度い色にすぎないが、古代にあっては神霊の憑依すなわち神の出現を意味する神聖な色¹⁾）を水平に安置するのにテコとコロや縄ぐらいで、狭い所に水平に置くことは大変な作業であったろうと思う。しかも水準器は無かった時代だから、竹の節を抜いて中に水を入れ測っのではと考えたが、今でも他に方法がないか頭を悩ましている。

石室の壁は他の多くの古墳と異なり垂直な壁で最下段の石には相当の重量が加わっているのに1400年たった今も石が崩れないのには驚かされる。（大阪城は石が崩れた所がある）石にどれだけの耐荷重があるか体験的に設計者は知っていたのだろうか。

馬具は錆で覆われていたが、透彫鞍金具を見て国宝である丸山古墳出土の金銅透彫鞍金具（大阪菅田八幡宮）や宮崎市西都原古墳群金銅鞍橋金具（東京五島美術館）¹⁾にも引けを取らない品と思う。これは鑄造で作られたと思うが古代の鑄造技術は、中国秦代または戦国時代に著作されたものと考えられる『周礼考工記』に次の一文が記載されている²⁾。

凡鑄金之状。金与錫黑濁之気竭、黄白次之。

*川辺了一（Ryoichi KAWABE）、大阪大学、工学部、溶接工学科、文部技官



皇室（欽明天皇～考徳天皇）と蘇我氏の系図

黄白之氣竭，青白次之。青白之氣竭，青氣次之。然後可鑄也。

ここで金とは銅の事を表わしている。これは現在の青銅の製造過程とは異なるが、意味は鑄造の場合の湯の状態。銅と錫を溶かすと黒煙が出る。次に黄白の湯気（煙），次に青白くなる。その後青くなれば鑄造する。

また別の一文には

金有六齊。六分其金而錫居一，謂之鐘鼎之齊。五分其金而錫居一，謂之斧斤之齊。四分其金而錫居一，謂之戈戟之齊。三分其金而錫居一，謂之大刃之齊。五分其金而錫居二，謂之削殺矢之齊。金錫半，謂之鑿斲之齊。

六種類の青銅が有る。錫の含有量が六分の一の時，鐘や器に適する。五分の一の時斧等の工具，四分の一は武器，三分の一は大きな武器になり，五分の二では鐵など，半分の時タガネのような物に適している。

目的に応じ銅と錫の配合の割合を具体的に記述した文章である。

金銅についても青銅と同じようにかんりの程度まで知識があったと思う。

被葬者は今秋石棺を開け墓誌が出ないと確定は出来ないが古墳が作られた当時は，継体天皇のあとを受け欽明天皇が即位（531年）した後から推古天皇（593～628年）の時代である。

欽明天皇が即位したのは母手白香皇女が前王

朝の皇女であり正統とされていたからであるが継体天皇の支持勢力である尾張氏らは，彼らの外孫の安閑，宣化両天皇を立て対抗したが偶然両天皇即位後数年もたたない内に没したことで欽明天皇即位後10年で皇室の内紛がおさまり安定した。

一世紀ほど前より大和朝廷の財政管理権を握り急速に頭角を現わしたと考えられる蘇我氏は，欽明天皇を支持し，稲目が娘堅塩媛と小姉君を天皇にさしあげている²⁾。

上図は，皇室（欽明～考徳天皇）と蘇我氏の系図である。

藤ノ木古墳の被葬者は，当時頭角を現わした蘇我稲目や皇室または在地豪族の膳氏に絞ってもよいと私は思う。

藤ノ木古墳の発掘調査は古墳周辺の宅地化の波によるものであるし，文化財保護法制定は，法隆寺金堂の壁画の一部焼失が原因であることを残念に思う。

環境の破壊に連がらない科学の進歩を切に望むものである。

文 献

- 1) 図説日本の歴史2 神話の世界 昭和49年 集英社
- 2) 図説日本の歴史3 古代国家の繁栄 昭和49年 集英社
- 3) 銅ものがたり 中村直勝，和田忠朝監修 1967年 アグネ

注 *みささぎ [陵] 天皇・皇后などの墓所 広辞典 宇野哲人編 集英社